

ダークツーリズム試論

——「ダークネス」へのまなざし——

A Study on Dark Tourism;
Gazing to “Darkness”

遠藤 英樹*

要 旨

本稿では、ダークツーリズムを「死や苦しみと結びついた場所を旅する行為」と定義したうえで、これを3つに分類する。それは、①「人為的にもたらされた“死や苦しみ”と結びついた場所へのツアー」、②「自然によってもたらされた“死や苦しみ”と結びついた場所へのツアー」、③「人為的なものと自然の複合的な組み合わせによってもたらされた“死や苦しみ”と結びついた場所へのツアー」である。さらに、「現象としてのダークツーリズム」と「概念としてのダークツーリズム」を区分し、「概念としてのダークツーリズム」の重要性を指摘する。「概念としてのダークツーリズム」を地域のなかへとインストールすることで、“死”や“苦しみ”でさえステレオタイプ化されていない視角からとらえかえし、新しい観光資源に変えていくことができるようになる。ただし“死”や“苦しみ”と結びついた場所であっても、観光にかかわる人びとが、その場所を「観光されるべきダークネス」として構築していかない限り「ダークツーリズム」の対象になることはない。その意味で、観光をめぐる「ローカリティ（地域）の政治性」が、「ダークネスに対するまなざし」を創りあげるのである。このことを主張した後で、「死の

* 立命館大学文学部教授

欲動」をキーワードとして、現代社会との関連でダークツーリズムの意味を考える。

Abstract

In this paper, I will define dark tourism as “the act of travel to sites associated with death and suffering”, and classify it into three categories such as 1) tour to sites associated with death and suffering caused by human beings, 2) tour to sites associated with death and suffering caused by nature, 3) tour to sites associated with death and suffering caused by mixture of human beings and nature. Second, I will separate “dark tourism as concept” from “dark tourism as phenomenon”, and indicate that “dark tourism as concept” is much important than “dark tourism as phenomenon”. By installing “dark tourism as concept” into regions, we will be able to change even death and suffering into new resources of tourism. However, sites associated with death and suffering cannot be objects of dark tourism, unless those who are concerned in tourism in the region construct the sites as “darksites to be toured”. In this sense, politics in locality is very important in creating tourist gaze for darkness. In the last, I will consider the meaning of dark tourism in modern society by using concept “death drive” in Freudian psychoanalysis.

キーワード：ダークネス、概念としてのダークツーリズム、社会的構築、ローカリティの政治性、死の欲動

Key words : darkness, dark tourism as concept, social construction, politics in locality, death drive

はじめに——「ダークツーリズム」とは何か？

日本においてユネスコに登録された世界遺産は、2015年3月末現在、自然遺産が4と文化遺産が14で、あわせて18ある。まず自然遺産として、「屋久島」（1993年登録）、「白神山地」（1993年登録）、「知床」（2005年登録）、「小笠原諸島」（2011年登録）がある。文化遺産としては、「法隆寺地域の仏教建造物」（1993年登録）、「姫路城」（1993年登録）、「古都京都の文化財」（1994年登録）、「白川郷・五箇山の合掌造り集落」（1995年登録）、「厳島神社」（1996年登録）、「古都奈良の文化財」（1998年登録）、「日光の社寺」（1999年登録）、「琉球王国のグスク及び関連遺産群」（2000年登録）、「紀伊山地の霊場と参詣道」（2004年登録）、「石見銀山遺跡とその文化的景観」（2007年登録）、「平泉——仏国土（浄土）を表す建築・庭園及び考古学的遺跡群」（2011年登録）、「富士山——信仰の対象と芸術の源泉」（2013年登録）、「富岡製糸場と絹産業遺産群」（2014年登録）が挙げられるだろう。

広島県原爆ドームも、日本にある文化遺産のひとつで、1996年にユネスコに登録されている。ただし、ここは「負の世界遺産」であるという点でほかのものと違っている。「負の世界遺産」とは、人類が犯した悲惨な出来事を伝え、悲劇を二度と起こさないために残す世界遺産のことを指す。

原爆ドームは、もともとは広島県物産の陳列・即売、県商工業の奨励を目的に、1915（大正4）年に広島県物産陳列館（のちに広島県立商品陳列所、広島県立産業奨励館に改称）として竣工された建物であった。それが、1945（昭和20）年8月6日に米軍B29爆撃機が原子爆弾を投下した際に爆心地近くに位置していたにもかかわらず、奇跡的に倒壊をまぬがれたのである。そのため、原子爆弾による被爆の惨禍を後世に伝えるべく、この建物が「原爆ドーム」として保存されることになったのだ。広島県原爆ドームも、日本にある文化遺産のひとつで、1996年にユネスコに登録されている。

原爆ドームは、もともとは広島県物産の陳列・即売などを目的に、1915年

に広島県物産陳列館として竣工された建物であった。それが、1945年8月6日に米軍B29爆撃機が原子爆弾を投下した際に爆心地近くに位置していたにもかかわらず、奇跡的に倒壊をまぬがれたのである。そのため、原子爆弾による被爆の惨禍を後世に伝えるべく、この建物が「原爆ドーム」として保存されることになったのだ。

JR広島駅からここを訪れるには、路面電車の広島電鉄に乗り、「原爆ドーム前」駅で降りるのが一番近いだろう。原爆ドームの前では、原子爆弾の悲惨さを語り伝えるインタープリター（解説者）が何人かいて、彼らの言葉に国内外からやってきた多くの観光客が熱心に耳を傾けている（写真1）。歩みをすすめ元安橋を渡ると、「原爆の子の像」や「平和の灯」がみえてくる。そこからもう少しだけ南へ行けば、「原爆平和記念資料館」がある（写真2）。ここには、原爆による熱線で焼け焦げた皮膚の写真や、放射能のために抜け落ちた女の子の髪の毛などが展示されており、戦争の惨禍、被爆の悲惨さをリアルに伝えてくれる（写真3）。

観光研究者は近年、原爆ドームのように戦争の惨禍を伝える場所を訪問する観光を「ダークツーリズム」と呼ぶようになっている。現在、この「ダークツーリズム」が新たな観光のあり方として注目を集めつつある。



写真1 原爆ドーム

出典：筆者撮映

では、「ダークツーリズム」とは何か。これについては、研究者間でも、まだ一致した定義があるとは言えない状況である。ただ、少なくとも「死や苦しみと結びついた場所を旅する行為」とする点では定義を共有しているのではないだろうか（Sharpley and Stone 2009: 10）すなわち、「戦争や災害の跡などの、人類の悲しみの記憶をめぐる旅」が「ダークツーリズム」なのである（井出 2014:216）。ここでは、ひとまず、それをもって定義としておきたい。



写真2 原爆平和記念資料館
出典：筆者撮映



写真3 原爆平和記念資料館の展示
出典：筆者撮映

1. 「ダークツーリズム」の分類

次に「ダークツーリズム」の分類について考えてみよう。「ダークツーリズム」は、訪問される場所によって、以下の3つに分類できるとされる。

1-1. 人為的にもたらされた“死や苦しみ”と結びついた場所へのツアー

「ダークツーリズム」には、戦争、テロ、社会的差別、政治的弾圧、公害、事故など人為的にもたらされる“死や苦しみ”と結びついた場所を訪問する行為がある。原爆ドームを訪問するツアーも、これに含まれるであろうし、ポーランド南部に位置する「アウシュヴィッツ＝ビルケナウ強制収容所」へのツアーも、これに分類されるであろう。「アウシュヴィッツ＝ビルケナウ強制収容所」は、第二次世界大戦中にナチス・ドイツによって推進された人種差別的な抑圧政策のもと、数多くのユダヤ人、政治犯、精神障がい者、身体障がい者、ホモセクシャルたちが収容され虐殺された場所で、原爆ドームと同じく「負の世界遺産」として1979年にユネスコ文化遺産に登録されている。

ニューヨークの「グラウンド・ゼロ」へのツアーも、こうしたものに含まれよう。「グラウンド・ゼロ」は、かつて、2001年9月11日にアメリカ合衆国で発生し3千名を超える命が失われたテロ事件の爆心地のひとつ「ワールド・トレード・センター」があった場所である。ここは現在、「ワンワールド・トレード・センター」が建てられており、大きく様変わりしているが、テロ事件が起こって間もない翌年の2002年頃には犠牲者の死を悼むために多くの人が訪問する光景がみられていた(写真4)。

ベトナム・ホーチミン市を中心にひろがるクチ・トンネルのツアーも、この分類に属する。クチ・トンネルは、ベトナム戦争中に、南ベトナム解放民族戦線によってゲリラ戦の根拠地としてつくられたトンネルである。また、未曾有の原発事故を起こしたチェルノブイリ原発へのツアー、病気による差



写真4 2002年におけるグラウンド・ゼロ周辺の風景

出典：筆者撮映

別をうけた人びとの苦しみに思いをはせるために訪問されるハンセン氏病の療養所、イタイイタイ病や水俣病をはじめ多くの公害病に関連した場所を訪問するツアーも、これに分類できるだろう。

1-2 自然によってもたらされた“死や苦しみ”と結びついた場所へのツアー

「ダークツーリズム」にあっては、自然災害によってもたらされる“死や苦しみ”と結びついた場所へのツアーも、忘れてはならない。井出は自然災害を、①地震災害、②津波災害、③火山災害、④台風の4つに整理している(井出2013:51)。

「地震災害」の例としては、阪神・淡路大震災を挙げることができるのではないか。1995年1月17日午前5時46分、突如、大地は上下に大きく揺れ、多くの家屋や建造物が崩れ落ち、火災があちらこちらに発生した。その結果、多くの人命が失われ、甚大な被害を生じさせた。倒壊してきた家具にふさがれ何時間も出られなくなったためにPTSD(心的外傷後ストレス傷害)にかかった人がいるし、愛する家族を一瞬に喪った現実を受容できずに今も苦しんでいる人がいる(写真5)。この震災をうけて「人と防災未来センター」が、阪神・淡路大震災の記憶を風化させることなく後世に伝え、防災・減災

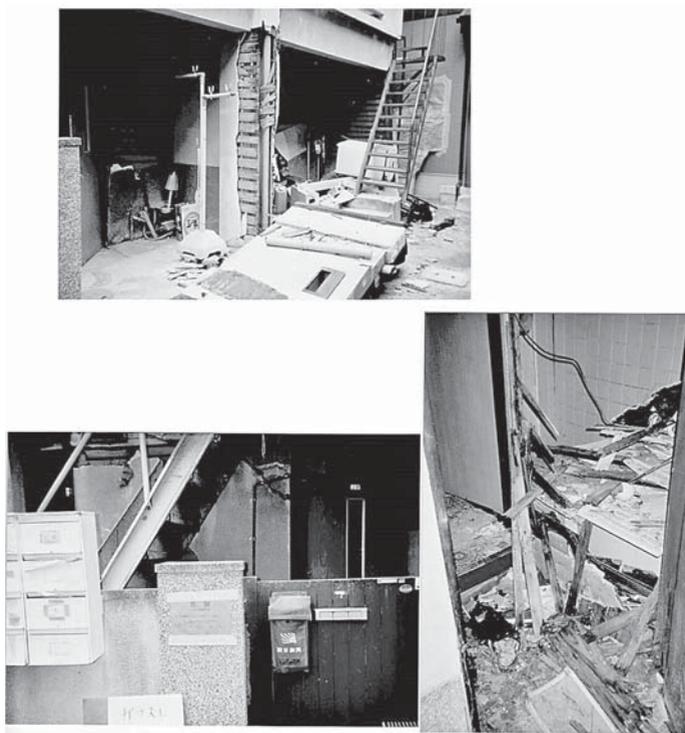


写真5 阪神・淡路大震災で半壊となった家屋
出典：筆者撮映

の世界的拠点となることを目的に神戸市中央区に創設された。ここへの訪問は、自然によってもたらされた“死や苦しき”と結びついた場所へのツアーになるだろう。また「津波被害」の例としては、2004年12月26日にインドネシアのスマトラ島をおそった大津波があり、この記憶をつたえる「アチエ津波博物館」を訪問するツアーが組まれたりしている。これも同様に2つ目の分類に属するものである。

1-3 人為的なものと自然の複合的な組み合わせによってもたらされた“死や苦しき”と結びついた場所へのツアー

自然災害は、発生した後の対応など人為的な要素によって、いっそう被害を拡大させることがある。これについては、東日本大震災の事例を挙げることができよう。

2011年3月11日午後2時46分、マグニチュード9.0という日本周辺観測史上最大の地震が発生した。この地震とそれに伴って発生した津波などによって、1万8千名をこえる死者・行方不明者をだした。同時に、津波におそわれた東京電力福島第一原子力発電所が全電源を喪失し原子炉を冷却できなくなり、炉心溶融（メルトダウン）が発生した。その結果、大量の放射性物質を漏洩させる事故を起こしたのである。その後、事故は収束にむかうことなく、原子力発電所近辺の福島県一部地域は「帰還困難区域」「居住制限区域」に設定され、避難生活の長期化を余儀なくされた。

このことをまのあたりにして東浩紀たちの研究グループは、『福島第一原発観光地化計画』という書物を出版した（東2013）。そこでは「ダークツーリズム」を軸に、震災と事故の記憶を風化させることなく“死や苦しき”に深く思いをはせる重要性がうたえられている。ここで計画されているツアーなどは、第3番目のものに位置づけられるものと言えよう。

以上のように分類されるダークツーリズムは、その濃淡によっても整理することが可能である（図1）。図をみると、「目的が教育志向か娯楽志向か」「保存を重視しているか商業性を重視しているか」「真正性を知覚できるか否か」「真正性がローカリティと結びついているか否か」「最近に起きたことか昔に起きたことか」「作弄的な意図が含まれているか否か」「観光のインフラストラクチャーとして整備されているか否か」によって、「非常にダーク」なツーリズムから「非常にライト」なツーリズムまで、さまざまな段階があることが分かる（Sharples and Stone 2009）。

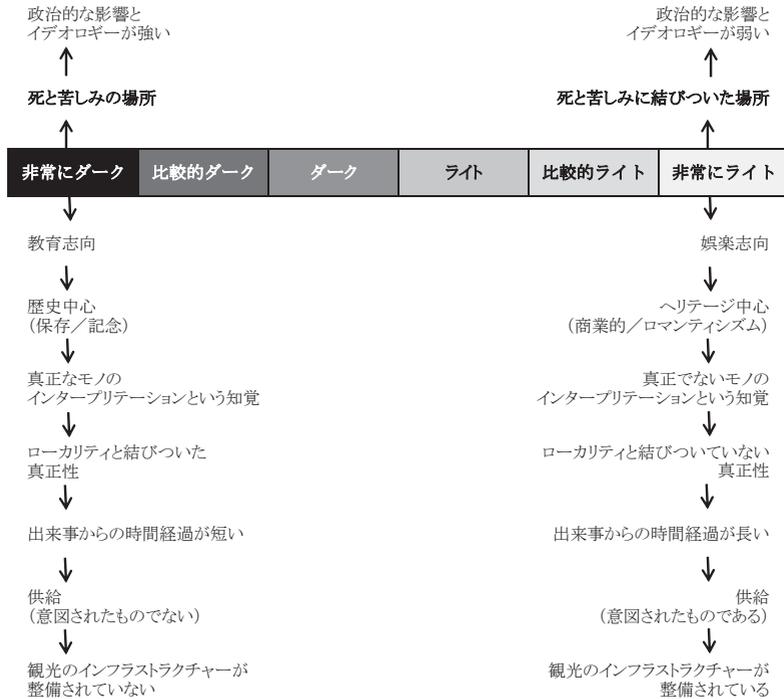


図1 ダークツーリズムのスペクトラム

出典：Sharpley and Stone (2009) p.21

ダークな色彩が強まるほど、観光地は、「死と苦しみ」を直接的に体現した場所となる。たとえば東日本大震災の被災地をめぐる旅は「非常にダーク」なツーリズムに位置づけられるだろう。逆に、かつて病院として用いられていた建物を娯楽用につくりかえたホラーハウスを訪れることは、ダークツーリズムの中でも「非常にライト」なものに位置づけられる(写真6)。こうした場所は「死と苦しみ」に無関係であるとは言えないが、あくまで娯楽の意図のもとで「死と苦しみ」を指し示しているのである。



写真6 かつての病院を改装したホラーハウス
出典：筆者撮映

2. 「ダークツーリズム」の何が新しいのか？

こうした「ダークツーリズム」という概念を観光研究においてははじめに積極的に用いたのは、雑誌『インターナショナル・ジャーナル・オブ・ヘリテージ・スタディーズ』に掲載されたジョン・レノンとマルコム・フォーレーによる1996年の論稿においてである（Foley & Lennon 1996a）（Foley & Lennon 1996b）。レノンとフォーレーはその後、『ダークツーリズム——死と災害のアトラクション』という本を執筆し、この言葉は新たな観光のあり方のひとつとして急速に注目を集めるようになっていった（Lennon & Foley 2010）。

もちろん現象としてなら、「死や苦しみと結びついた場所を旅する行為」は、もっと以前から存在していたのかもしれない。たとえばアウシュヴィッツ＝ビルケナウ強制収容所へのツアーはかなり以前から行われていたし、原爆ドームへのツアーもかなり以前から修学旅行などに組み込まれていた。のように考えるなら、「現象としてのダークツーリズム」は、決して新しいものではないと言えよう。では何をもって、「ダークツーリズム」が新しい

とされているのだろうか。それは、以前から存在していた多様な観光現象を、「ダークツーリズム」という同一の概念でくくるという点にほかならない。そうすることで、「“人類の歴史”への問い」と「“観光”への問い」が初めて可能になったのである。

2-1 “人類の歴史”への問い

これについては、香川県豊島へのツアーから考えてみよう。豊島は、美しい瀬戸内の海に浮かぶ14.4平方キロメートルほどのどかな島だ。だが、かつてここには、産業廃棄物が違法に大量投棄された歴史があり、産業廃棄物による環境破壊の苦しみを住民たちは背負ってきた。こうした環境破壊による苦しみに思いをはせるツアーは、現在「ダークツーリズム」という概念のもとで言及されるようになっていく。

しかしながら、こうした環境破壊の苦しみに思いをはせる豊島のツアーは、アウシュヴィッツ＝ビルケナウ強制収容所など戦争による苦しみに思いをはせるツアーや、チェルノブイリ原発事故など事故による苦しみに思いをはせるツアー、自然災害による苦しみに思いをはせるツアーなどと同じものだろうか。豊島のツアーには、その場所、そのコンテクスト（文脈）だからこそ経験できるものがあるはずである。ほかのツアーの場合も同様である。

場所もコンテクスト（文脈）も何もかも異なっているにもかかわらず、そういう違いをこえ、すべてを“人類の歴史”における負の産物をめぐる旅であるとみなしていく。そのために必要だったのが、「ダークツーリズム」という概念装置ではないだろうか。場所もコンテクスト（文脈）も異なる多様な観光現象を、「ダークツーリズム」という同じ概念でくくる。それによって初めて、われわれは、“人類の歴史”という近代的な普遍性に刻印づけられた枠組（ミシェル・フーコーの議論にあるような）のもとでの問いかけを、観光で志向できるようになったのである。

2-2 “観光”への問い

これまで観光は、地域の素晴らしい側面をみせることに傾斜してきたように思われる。そのことは、観光学の教科書で「観光」の語源とされていることにもみてとることができよう。観光学の教科書では、「観光」という言葉は、古代中国の戦国時代に編纂された『易経』の言葉、「觀國之光。利用賓于王。（国の光を観る。もって王に賓たるによろし）」という句に由来するとされている¹⁾。意味は、「国王の人徳と善政により国が繁栄し、その国を訪れる人にはその国が光り輝いてみえる」ということらしい。この句にもみてとれるように、地域の素晴らしいところ、美しいところ、ポジティブなところをみせること——それこそが観光であるというイメージに私たちはとられ過ぎてきたのではないだろうか。

これに対して、「死や苦しみと結びついた場所を旅する行為」を意味する「ダークツーリズム」は、その場所のネガティブな側面に目を向け、地域における人びとの悲しみに思いをはせ、悼み、祈るものである。「光」ではなく「闇（ダークネス）」をみる観光は、観光における既存のイメージをくつがえし再考をうながすであろう。

3. 「ローカリティ（地域）の政治性」において社会的に構築される「ダークネス」

以上、「現象としてのダークツーリズム」「概念としてのダークツーリズム」の区別をふまえるならば、新しいのは「現象としてのダークツーリズム」ではなく、「概念としてのダークツーリズム」なのだと言える。「概念としてのダークツーリズム」を地域のなかへとインストールすることで、“死や苦しみ”でさえステレオタイプ化されていない視角からとらえかえし、新しい観光資源に変えていくことができるようになる。

ただし“死や苦しみ”と結びついた場所があれば、その場所が自動的に

「ダークツーリズム」の対象となるかということ、そういうわけでもない。戦跡や災害の被災跡などが保存されていたとしても、観光客が「観光されるべきダークネス」として、そのままざしを向けるように方向づけられていないのであれば、「ダークツーリズム」の対象になることはないのである。このことについて、シンガポールのシロソ砦を事例に考えてみよう。

シロソ砦はシンガポール南部にあるセントーサ島に位置しており、1880年にイギリスにより建設された要塞である。日本軍がシンガポールを攻略したとき、イギリス軍がここにたてこもって迎え撃っている。日本軍占領時代には戦争捕虜の強制収容所として用いられ、現在は「シロソ砦の戦争記念館」として砲台なども復元されている。いまは、要塞の中を観光客がみることができるよう整備され、英語で現地ガイドのツアーも行われている（写真7・8）。ほかにもさまざまな戦跡の展示があり、イギリス軍が日本軍に無条件降伏したときの様子を蝸人形で再現したコーナーもある（写真9）。

シンガポールにとってシロソ砦は、第2次世界大戦の深い傷あとを残した場所である。しかし、多くの観光客がシロソ砦を「観光されるべきダークネス」として、そのままざしを向けているかということとそうでもなく、私が調査に行ったときも、戦争当事国の国民だったはずのイギリス人や日本人も含め、ほんの少ししかシロソ砦をみにきてはいなかった。にもかかわらず、海外からの観光客のうちセントーサ島を訪れる人は、年間を通して非常に多いのである。とすれば彼らはいったい、セントーサ島のどこを観光しているのだろうか。それは、カジノ、ユニバーサル・スタジオ・シンガポール(USS)、海洋水族園マリン・ライフ・パーク、マーライオン・タワーなどセントーサ島にあるリゾート施設だ。観光客のほとんどは、こういったリゾート施設を観光するのである（写真10）。

これら林立するリゾート施設は、シンガポール政府の観光政策の成果とも言えるものである。この島は、かつてマラリアが流行し多くの死者をだしたことから、マレー語で「プラウ・ブラカン・マティ（背後の死者の島）」と



写真7 シロソ砦戦争記念館
出典：筆者撮映



写真8 シロソ砦戦争記念館
出典：筆者撮映



写真9 シロソ砦戦争記念館の蠟人形
出典：筆者撮映



写真 10 リゾート感あふれるセントーサ島の風景

出典：筆者撮映

呼ばれていた。かつて作家である井伏鱒二も「死の彼方」と呼び、島には暗いイメージがつきまとっていた。第二次世界大戦のときも、この島は戦禍の象徴のような場所になり、島はより暗いイメージでおおわれるようになった。そこで政府は、イギリスから返還された後、島の名称を「セントーサ（静けさ）」というリゾート的な雰囲気のものにあらため、セントーサ開発公社を設立し、この場所の観光開発を重要な政策のひとつと位置づけたのである（田村・本田 2014：122-128）。

このような観光政策からするならば、＜ツーリストのまなざし＞の中でシロソ砦が「観光されるべきダークネス」として映り、「ダークツーリズム」の対象となることは決して好ましいことではないだろう。政府だけではない。セントーサ開発公社もまた、そうではないか。また、ここで営業しているテーマパーク、カジノ、ホテル、レストラン、土産業等の関係者も同じ思いであろう。さらに数多くのツーリストをセントーサ島のリゾート施設におくりこんでいる旅行会社の人びとも、同様だ。政府、セントーサ開発公社、テーマパークやホテル等の関係者、旅行会社、彼らはすべて、セントーサ島が明るく楽しいリゾート施設だと＜ツーリストのまなざし＞の中で映ることを望んでいるのである。

たとえ戦跡や災害の被災跡などが保存され、それが歴史的にどれほど重要であったとしても、観光にかかわる人びとが、それを「観光されるべきダークネス」として構築していかない限り、その場所は「ダークツーリズム」の対象になることはない。観光をめぐる「ローカリティ（地域）の政治性」が、「ダークネスに対するまなざし」を創り上げるのである。その意味で、ある場所をダークツーリズムで観光するという行為じたいが、すでに、中立的ではないメッセージを帯びた行為となっているのである。

“死や苦しみ”がそのまま、「ダークツーリズム」の対象となるのではない。そうではなく、ある国や地域の中で観光にかかわる人びとが、“死や苦しみ”を「観光されるべきダークネス」として構築しようとする、その限りにおいて初めて、ある場所の“死や苦しみ”が「ダークツーリズム」の対象となるのである。したがって、「ダークツーリズム」においては、「それが誰にとってのダークネスなのか（ダークネスでないのか）？」「どのような状況のもとで、どのようなものをダークネスとする必要がある（なかった）のか？」「あるものをダークネスとする（ダークネスとしない）ことで、得られるもの、失うものは何なのか？」などを問うていく必要が生じるであろう。

4. 抑圧されたものの回帰としてのダークツーリズム

以上、新たな観光のあり方として注目を集めつつある「ダークツーリズム」について考察を加えてきた。しかし、なぜわれわれは、「ダークツーリズム」に魅せられるようになってきているのだろうか？最後に、この問いについて述べ、むすびにかえたい。

この問いについては、オランダにあるフローニンゲン大学の観光研究者ドリーナ・マリア・ブーダが、紛争地域を訪れる「ダークツーリズム」を事例として取り上げた研究がヒントを与えてくれる（Buda 2015）。この論文でブーダは、「死の欲動」をキーワードとしながら論を展開する。「死の欲動」

とは、精神分析学者ジークムント・フロイトのキーワードのひとつである。

“死”“苦しみ”は、“生”“喜び”と隣り合わせにあるべきもので、日常性のもとにあるはずのものである。“死”“苦しみ”はつねに“生”“喜び”と相克しながら、日常を形成している。フロイトによれば、自己破壊的な行動や苦痛へみずから投じるような行為へと駆り立てる「死の欲動」は、未来を生きようとする「生の欲動」とつねにセットとしてあるのだ(立木2006:218)。

しかしながら、現代人は、日常性のなかに“死”や“苦しみ”を組み込むことを怠ってきた。“死”や“苦しみ”は現代社会の中で否定的なものとして、できるだけ遠くに追いやられ、みえないようにされ、漂白され「抑圧」されてきたのではないか。現代社会は、死体を見ることさえほとんどない社会となっているのである。「ところが、抑圧されたものは、たんに抑圧されるがままに留まっているわけではない。それは……代替物を送り込もうとする」(立木2013:29)。

社会において「抑圧」されたものは、かならず別のかたちとなって「回帰」する。ダークツーリズムは、現代社会において抑圧されたものの代替物として、抑圧されたものが観光的なかたちをとって回帰してきたものであると考えられないだろうか。観光とは、現代社会の日常性と異なる視点を創り出す「異化作用」を通じて成立している。それゆえ日常性を形成するものであるはずの“死”や“苦しみ”が「究極の非日常」へと変換され、ダークツーリズムのもとで人びとは、現代社会が「抑圧」してきた“死”や“苦しみ”を覗きみたい衝動に駆り立てられるようになっているのである(古市2012:103)²⁾。

いま「ダークツーリズム」に注目があつまるようになっているのは、そのことと深く関係しているのかもしれない。そう考えるなら、「ダークツーリズム」のもとで「非日常的な“死”や“苦しみ”」(ダークネス)を観光することで、実はわれわれは、とても大事なことから目をそらし逃避してしまっている可能性も否定できなくなる。とても大事なこと——それは、日常性の

もとで“死”“苦しみ”をすぐ隣りに感じつつ、「死”“苦しみ”とともに生きる」ことである。ダークツーリズム研究は今後、現代社会におけるわれわれの“生”“喜び”と“死”“苦しみ”のあり方を考える大きな視座をもって、議論を展開していくべきであろう³⁾。

付記

本稿は、『月刊 地理』Vol.60に掲載された論稿を加筆修正したものである。

注

- 1) たとえば、前田勇編著(1995: 15-16)を参照してもらいたい。
- 2) これについては、「ダークツーリズムという問い」というシンポジウム(2014年11月16日: 立命館大学衣笠キャンパス)で市野澤潤平が行った、「ダークツーリズムと観光経験——被災地観光をめぐる一考察」という発表が重要である。市野澤はスーザン・ソンドクの議論をふまえつつ、「ダークツーリズム」に「他人の苦しみを『覗き見る』行為」という側面があることを指摘している。
- 3) 以上のように、ダークツーリズムは、①「“人類の歴史”への問い」、②「“観光”への問い」、③「“ダークネス”への問い」、④「現代社会における“死”や“苦しみ”の意味への問い」といった四重の問いを含んだ現象なのである。

参考文献

- 東浩紀編(2013)『福島第一原発観光地化計画』ゲンロン
- Buda, Dorina M. (2015): The Daeth Drive in Tourism Studies. *Annals of Toursim Research*. 50
- Foley, M and Lennon, J. (1996): Editorial--Heart of Darkness. *International Journal of Heritage Studies*. 2(4)
- Foley, M and Lennon, J. (1996): JFK and Dark Tourism--A Fascination with Assasination. *International Journal of Heritage Studies*. 2(4)
- 古市憲寿(2012)「『ダークツーリズム』のすすめ」『新潮45』12月号
- 井出明(2014)「ダークツーリズム」、大橋昭一・橋本和也・遠藤英樹・神田孝治編著『観光ガイドブック——新しい知的領野への旅立ち』所収、ナカニシヤ出版
- 井出明(2013)「ダークツーリズム入門 #1 ダークツーリズムとは何か」ゲンロンエトセトラ7

Lennon, J. and Foley, M. (2010): Dark Tourism--The Attraction of Death and Disaster. Cengage Learning.

前田勇編著 (1995) 『現代観光総論』 学文社

Sharpley, R. and Stone, Philip R. eds. (2009): The Darker Side of Travel--The Theory and Practice of Dark Tourism. Channel View Publications.

田村慶子・本田智津絵 (2014) 『シンガポール謎解き散歩』 中経出版

立木康介 (2006) 『面白いほどよくわかる フロイトの精神分析』 日本文芸社

———— (2013) 『露出せよ、と現代文明は言う——『心の闇』の喪失と精神分析』 河出書房新社